

暗な中を走らねばならず、とても怖い思いをしました。同じような経験はパリに行く時にもありました。フランスの有料高速道路に入った途端に真暗、オランダはすべて無料だというのに、30m間隔毎にオレンジ色のナトリウム灯（霧の中でも見える。）が立ち並びとても運転しやすいのです。

会社からの帰り道に、ガス田を見に行きました。畑の真中、頑丈な金網とテレビカメラで厳重に守られている約200m四方のコンクリートの広場に12基のポンプが備えつけられていました。深さ3,000mのガス層から吸い上げているのです。すべてリモートコントロールで、その静かさと冷たさが、とても印象的でした。（23回生）

浅井先生に教えられて

栗原真帆子

お茶大地理学教室を離れて早一年、結婚しもうあと幾日かで一児の母となろうとしている私です。毎日の生活に追われながらもつねに何かしなくてはいけないと叫ぶ声がどこからか聞こえてきては、私を駆り立てます。それというのも卒論・修論が中途半端なままで終わってしまったからでしょう。

「人間と自然との関係」ということが私の研究上のテーマでした。特に風土、土地柄というものを人間の営みの中から取り出し、描写してみるということでした。しかしあまりにも大きなテーマであり、しかもこのことを考えていくには地理学のみでは無理なようで、民俗学などにも首をつっこまなくてはと考えるに至りました。ところが、当分子育て期に没入しなければならなくなり、私自身の勉強はストップ！まあ長い一生、私のライフ・サイクルの中に先のテーマを追い求めていくことをどこかに組みこんでいこうと思っている現在です。

ずいぶんと長い前置きを書いてしまいましたが、この「人間と自然の関係」に興味を持つきっかけとなりましたのが、浅井先生の気候学でした。先生は気候学のお立場から「人間と自然」についてお考えになっておられ、授業の中でもたびたびそのことに触れられました。その中でもハンティントンの「気候と文明」には特に興味をひかれ、私は地理学の中でもこういった方面に進んでいきたいと思いました。結局、卒論・修論と私は浅井先生に指導して頂いたのですが、その際いつもテーマの根本にあったことは先に掲げた「人間と自然との関係」についてでした。漠然としていてよくまとまってもいない私の考えを先生はよく理解して下さい、親切に指導して下さいました。

地理科の卒論提出日は1月17日です。ですから年末年始は大忙しとなるわけですが、1975年12月30日、暮れもおしせまった日、守衛さんに鍵をあけてもらい閑散とした文教育棟の中、浅井先生のお部屋で、鈴木勢津子さんと私は卒論の下書きを先生に見て頂き最後の仕上げをして頂きました。今でもその時の光景が目には浮ぶようです。まあ、これは先生の懇切丁寧な御指導の一端ですが、本当に細かいところまで目を通して下さいました。

私が大学教育で得たものは、どうも直接生活に結びつくものではないようですが、これから一生の勉強課題としては不足のない、いや大きすぎるくらい課題です。一生追い続けていけることがある——これは私にとって大変幸せなことだと思っています。（24回生）